

男鹿市複合交流施設整備基本構想

概要版

令和8年3月 男鹿市



1 目的と位置づけ

策定の背景と目的

人口減少・少子化・高齢化が同時に進行し、市民の学び・交流の機会、子育て支援、地域活力の向上といった複合的な課題が顕在化。これらに対応するため複合交流施設の整備を進める。

- **市民の学び・交流拠点の強化**

(図書館・公民館の老朽化、機能・空間の制約)

- **子育て世代が安心して過ごせる場の整備**

(雨天時の遊び場、保護者のつながりの場が不足)

- **来訪者が自然に立ち寄れる公共拠点**

本構想の位置づけ

施設整備プロセスの最初の重要なステップ

- (1) 市の現状や課題の整理
- (2) 市民・関係者の声やニーズの把握
- (3) 施設に求められる機能や考え方の整理
- (4) 候補地の比較や方向性の検討
- (5) 事業の進め方や運営方式の初期判断
- (6) 詳細な計画に進むための前提条件づくり

今回



2 現状と課題

約24,000人

人口(R5)

ピーク時の約4割

約50.3%

65歳以上割合

全国平均を大幅に超過

約30.9%減

未就学児減少率

R2からR6にかけて

約222万人

観光入込客数(R5)

宿泊割合3.8%

既存施設	現状	課題	備考
図書館	施設の老朽化(築48年)、空間が狭い、バリアフリー未対応	多世代が過ごせる環境、ICT活用サービス拡充	延床440㎡、蔵書 79,908冊
子育て支援センター	設備老朽化や構造上の制約、ニーズ多様化	老朽化・駐車場の制約、利用者ニーズ対応	R7.6月移転、延床1,107㎡
観光施設	豊かな自然・伝統文化、低い滞在型観光割合	観光スポット点在、冬季客数減少傾向	入込客約222万人、宿泊率3.8%

課題のまとめ

- (1) 子育て世代がより安心して利用できる環境づくり
- (2) 図書館機能の進化と多世代が心地よく学べる空間づくり
- (3) 市民と来訪者が自然に交わる場の創出

3 市民の声(アンケート・ワークショップ)

市民アンケート(回答数 588件 R7.12月実施)

年代別に見る期待機能

- 学生世代: 読書・学習、ワークスペース利用
- 子育て世代: 子どもと遊ぶ、カフェ、親子参加
- 中高年層: 読書・学習、カフェ、イベント・講座
- 全世代共通: 読書・学習、カフェ、イベント参加

立地条件の傾向

- 最多「商業施設の近く」(338件)
- 次点「駅の近く」(260件)
- 十分な駐車場、安全な動線も重要

自由記述の声

- 子どもと安心して過ごせる場所への強い期待
- 世代を問わず「居場所」を感じられる空間
- 新築整備への慎重な意見も存在

市民ワークショップ(R8.1月開催)

多様な利用者像ごとの過ごし方

- 子育て世代: 声を出せるスペース、大人の時間も
- 小中学生: 子どもだけで利用できる自立的居場所
- 学生・働く世代: 集中と交流の両立、Wi-Fi完備
- 高齢者: 何もしなくてもいられる場所
- 来訪者: 男鹿の文化や魅力に触れられる場所

市民ニーズの総括

- 分けるより共存することへの期待
- 日常性と非日常性の重なり
- ハードと運営を一体で考える視点

4 コンセプトと基本方針

基本コンセプト

未来を担う世代を育む、地域の多様な暮らしが重なり合う拠点

関係の芽をつくる

初めて訪れる人から日常使いの人まで、男鹿との出会いや関係が芽生え育つきっかけとなる。

分けるのではなく重ねる

機能や世代を切り分けず、同じ空間に多様な使われ方を重ねる。

目的がなくても居られる

明確な目的がなくても立ち寄り、居てよいと思える場。

図書館機能

目的の有無にかかわらず居られる開かれた居場所。地域文化への接点づくり。各エリアを完全に切り離すのではなく、異なる過ごし方が重なり合う構成。

屋内こども広場

子どもを中心に多世代の関係が生まれる場。天候に左右されず安心して遊べる環境を確保。子どもと大人が同じ時間を共有できる構成を重視。

5 候補地比較と立地方針

比較項目	男鹿工業高校敷地(船越)	船越こども園隣地(船越)	男鹿駅周辺広場(船川)
敷地規模	十分な規模を有する ※既存校舎活用の可能性	十分な規模を有する	十分な規模を有する ※2階建を想定
土地所有者	県有地 土地取得コスト・手続要	民有地 土地取得コスト・手続要	市有地
アクセス	幹線道路沿い	同左	鉄道駅至近 市役所やオガーレに近接
周辺環境	ファミリー世帯集中 大規模商業施設近接	同左	居住に加え観光資源・ 自然資源との近接性
浸水リスク	比較的低	同左	比較的高 ※避難施設に近接
駐車場	敷地内での計画を想定	同左	近隣駐車場活用も検討

船越エリアの特徴

- 特にファミリー世帯が集中するエリア視点で優位性有り
- 土地取得のコスト・手続きが発生する点は留意が必要。

船川エリアの特徴

- 観光客も取り込む視点で優位性がある。
- 浸水リスクへの対応は留意が必要。

6 施設規模・事業費・整備スキーム

施設規模・概算事業費

- ・ 既存施設合計: 約1,600㎡(約480坪) 目安
- ・ 概算建設費: 約14~15億円程度(仮定値| 建設工事費坪単価300万円/坪の場合)
- ・ 用地取得費、設計費、什器備品費等別途費用も検討要
- ・ 建設資材物価指数: 過去10年で約1.5倍に上昇

整備スキーム・運営方式

- ・ 従来型、DB、DO、DBO、PFI方式を比較検討
- ・ 想定事業規模: 10~20億円程度
- ・ DBO, PFI方式は現時点では最適とは言い切れない
- ・ DB / DO方式等、民間知見を取り入れやすい手法も選択肢として検討
- ・ 基本計画で民間事業者ヒアリングも実施予定

持続可能な運営のための課題

運営体制

日常利用を支える運営体制の確保
(人が常駐する安心感、見守り体制)

共存の工夫

多様な利用者の共存を成立させる
運営の工夫(音・視線の配慮、
ゾーニング等)

アクセス

交通・アクセスを含めた運営上の
配慮(循環バス連携、送迎動線等)

7 今後の進め方



次フェーズ(基本計画)への引き継ぎ論点

- 施設規模・機能構成の具体化
- 立地の決定(交通アクセス、駐車場、周辺施設連携等を総合評価)
- 事業費および財源確保の考え方整理(国・県補助制度、地方債等)
- 整備スキームおよび運営方式の選定
- 運営体制と人の関わり方の具体化
- 市民・関係者との継続的な対話の設計